

点とは逆に、非人にも授戒がなされ、持戒が期待されたのであり、非人への授戒が多様な戒による全階層の救済という叡尊教団に特徴的な活動を導き出した、という見方も成り立ちうるのではないか。各階層の生活条件に即した、比丘戒から八斎戒にいたる多様な戒が、全階層に一貫する救済方法として想定されていたと思われる。こうした側面が、「七衆」教団の形成（感身学正記）建長元年・一二四九条および「元亨釈書」西大寺叡尊伝）として記録される叡尊の宗教活動の主眼であったのではないか。

戒律以外の多様な信仰・行法の把握という著者の方針とは逆に、授戒活動の視点からの読後感となってしまうが、評者は、筆者が本書第一部で検討された叡尊以前の南都仏教研究の必要と同じく、伝統と変化を追うという意味で、戒律活動も含めて叡尊・忍性以降の教団の展開を追跡する必要がある。第二部第六章で指摘されるように、叡尊とその後継者忍性は異質な性格をもつし、叡尊没後の教団指導者についても、鎌倉の忍性だけでなく、叡尊を継いだ西大寺二世長老信空を視野に入れて論じなければならない。祖師たちの世代以降の鎌倉仏教の展開を、著者が本書でおこなったように幅広い信仰世界をふまえて記述すること、これが本書によって提起された次の課題であろう。

（日本学術振興会特別研究員）

前田 勉著

『近世日本の儒学と兵学』

（べりかん社・一九九六年）

高橋 文博

本書は、前田勉氏がこれまで意欲的に進めてきた近世日本思想史研究の集大成である。以下に述べるように、本書は多くの生産的知見を含むものであり、学界を裨益すること大なるものであると考える。また、わたくし自身、本書所収の多くの論文を発表当時に拝読して多大な刺激をうけた。このたびこのような形で公刊されることを心より喜ぶものである。

まず、本書の構成を「目次」によって紹介する。

序 章 近世日本思想史の対立軸としての兵学と朱子学

第一節 朱子学不適合説の問題

第二節 兵営国家と兵学

第三節 近世日本の朱子学の可能性

第四節 兵学と朱子学の対立点

第一章 林家の朱子学

第一節 林羅山の挫折

第二節 林読耕斎の隠逸願望

第二章 山鹿素行の異端批判

第一節 素行学確立以前の兵学と朱子学

第二節 素行の心性論

第三節 素行の「異端」統制策

第三章 徂徠学の原型

第一節 『孫子国字解』の思想

第二節 兵学と「聖人の道」の接点

第四章 反徂徠学者の兵学と朱子学

第一節 闇齋学派の『孫子』解釈

第二節 松宮觀山の徂徠批判

第三節 觀山の経世策

第五章 幕末の兵学と朱子学

第一節 『新論』の尊皇攘夷思想

第二節 古賀侗庵の世界認識

第三節 幕末日本のアヘン戦争観

第四節 吉田松陰における兵学と朱子学の止揚

各節は、基本的に、既発表の個別論文に修正を加えて成ったものである。各節の元になった既発表論文のうち、もともと古いものは一九八二年、もともとも新しいものは本書刊行年の一九九六年である。そして、序章・第一節、第四節、第五章・第二節は「書き下ろし」であり、序章・第二節、第三節は、刊行年の公表であって「書き下ろし」同様である。つまり、序章は、本書のもっとも新しい部分を構成しているのである。

この序章は、本書の分析視角を提示することで、自ずと前田氏の近世日本思想史についての見通しを語っている。そして、序章の見通しの妥当性は、以下の諸章によって検証されるといって仕組みになっている。本書は、いわば倒叙形式で構成されており、序章は本書の結論部分といふべきものである。

こうして、本書の読者は、前田氏が序章で示した近世日本思想史の見通しを、各節においてその妥当性を検証しつつ読み進むことになる。その妥当性にかかわるわたくしの見解は後に述べる。さし当たりいえることは、本書が極めて明確な方法論的意識に貫かれて構成された書物であるということである。

二

序章は、本書の分析視角と内容の概要を示して、その結論的主張を述べたものとみられるものであるから、やや詳しくみることにする。

さて、前田氏がまず立てる問題は、「近世日本の国家の支配思想は何か」である。前田氏は、この問に対する答として、かつて有力なものとされた朱子学を、近世国家・社会にとって適合的ではないとして兵学を挙げる。何故なら、近世日本の国家は、社会の秩序を武力によって保証する「兵営国家」であり、その支配の思想が兵学であるからである。

前田氏によると、近世日本の兵学は、戦闘方法・戦闘装備を扱うだけでなく、軍隊統制論と戦術・戦略論を中心とするもの

であり、さらにそれを戦時だけでなく平時の統治論へと展開している。兵学の軍隊統制論は、士卒を全体の立場から諸機能の分担者として合理的に組み合わせ、各自の私的判断と行動を厳しく抑圧するとともに、戦闘へ向けての自発的服従心を喚起するものであり、ここでは大將が士卒の心を操作する「詐術」が重大な意義をもつ。兵学は、この軍隊統制論を平時の統治論に応用したものであり、社会の構成員を有用性の見地から分業論的に捉えるが、ここでは「無用者」は排除される。

それでは、近世日本において朱子学が多くの真面目な学者によって学ばれたことの意味はどこにあるのか。前田氏は、「朱子学の理想主義」の中に現実に対する「変革的原理」への「可能性」があり、それを「自由」と「平等」の観念があることに認める。まず、人間が自己の主人であろうとする「自律」としての「自由」の主張が朱子学にはあり、そこに理想にもとづく現実批判の可能性がある。ただし、朱子学の自己実現としての「自由」には、その実現の対象としての「理」が階層的身分秩序という差別原理であるが故に、下位者の上位者への自発的服従を「自由」とし、また上位者による下位者への強制を正当化し得るといった「限界」がある。だが、前田氏は、この「限界」は、兵営国家の中での朱子学の一定の批判的な「変革」的役割の存在、及び朱子学は外来思想であるから「強制」に結びつく面が希薄であることにより、留保し得るとする。

「朱子学の理想主義」における「平等」については、「理」の

観念の普遍性が人間の本心の次元での平等観念を基礎づけ、「一定の限界を有するとはいえず」、それが男女平等のみならず、被差別者への共感をも可能にしたことに重く着目すべきであるとする。

このような現実批判的・変革的原理を内包する朱子学は、近世の兵営国家には不適合であり、しかも兵営国家の支配の思想である兵学の要求する社会の中での有用性を自ら示すことを迫られるが故に、朱子学者は疎外感をつのらせる外はなかったとする。

こうして、前田氏は、兵学と朱子学の対立を分析軸として近世日本思想史を見通そうとするのであるが、序章・第四節で両者の対立点を、次のように整理している。

第一は、集団と個人の次元における「法」と「理」の対立である。具体的には、兵学は、個人の自律的判断・行動を抑圧し、集団への個人の自発的服従を求めて「詐術」を駆使するが、朱子学は性善説により個人の主観的判断・行動に根拠を与え、「詐術」を批判する。

第二は、自国認識と対外認識である。兵学は、日本中心主義を培養するが、その際、敵―味方の発想を基本として、自国・日本（味方）の優越と外国（敵）の劣等を主張する仕方である。「華夷」を区別するのに対して、朱子学は、理の普遍性により自国中心主義を批判し得る。

第三は、経済活動にかかわるものである。兵学は、欲望解放

論にたつて積極的な経済政策をとる傾向にあり、それは一八世紀中頃から「富国強兵」論として展開される。朱子学は、欲望制限論にたつところから消極的な経済政策であり、内容的にも貧困であるが、朱子学の「仁政」の理念は、「富国強兵」への理念的な立場での批判の根拠を提示する点で、兵学の経済政策とは対照的である。

この序論で、本書の分析視角、さらに内容の概要まで示されたことになる。以下、朱子学と兵学の「対抗・癒着の関係」(一頁)について九人の思想家に即して分析される。

三

具体的な分析に入る前に、本書の分析方法上の特長を指摘しておく。それは、未翻刻史料に数多くあたる地道な作業をしていること、よく知られた文献についても精密な読み直しを行っていること、研究史を十分に踏まえて再点検をしていること、さらに、思想を一定の歴史的社会的状況に対応するものとして捉えようとしていることである。これらのことが、方法論的意識の明確さと相まって、論証に説得力と具体性を与えている。本論にあたる個々の思想家についての考察をみる段取りであるが、ここでは、ごく簡略に各節の考察結果を素描するとともに、その分析の積極的意義、いいかえれば批判的に検討に値する論点を、これまた簡略に指摘する。

第一章第一節「林羅山の挫折」は、羅山の「天地の間の一塵

人」とする強い疎外感の存在を、兵営国家の中で朱子学の立場を貫き得なかつた挫折体験によることとし、それに応じて「決定的な思想的矛盾」に陥っていることを述べる。

第一章第二節「林読耕斎の隱逸願望」は、羅山の四男林読耕斎が、朱子学からする現実政治への批判意識とその裏返しである現実からの疎外感により「山林」隱逸への願望をもちながら、儒教儀礼の実行を通して世俗を改変する努力を継続したことを述べる。

この第一章は、御用学者林家の人々の内面に立ち入ることで、近世日本社会における朱子学者の疎外感を指摘するもので、従来からの「朱子学不適合説」を一步進める。

第二章第一節「素行学確立以前の兵学と朱子学―素行の「遊民」批判―」は、素行学確立以前の山鹿素行の思想を、一貫して兵学に儒学を取り込もうとしたものであり、その前提は、有機的な機能集団である軍隊組織の軍隊統制論と、軍隊組織の編成原理をそのまま社会に拡張するもので、朱子学者を含む「無用者」を排除する社会観であったと述べる。

第二章第二節「素行の心性論」は、素行の心性論を、内的動機を棚上げして外的行動を第一義におく結果主義であり、自己の個人的感情や価値観を抑制して公共的利益への志向を求めるものとし、朱子学の主張を個人的感情や価値観の絶対化だと批判すると述べる。

第二章第三節「素行の「異端」統制策」は、素行が仏教を「聖

学」たる儒教に対する異端とし、これを統制する方法として日常生活全般の外形を画一化する風俗教化を「聖人の礼」として提示したが、それは儒学の価値観とは全く別の兵学思想であると述べる。

この第二章は、素行の思想を「兵営国家」の支配の思想とし、「本来的自己」の実現を求めるのではなく、「詐術を縦横に駆使する」人間観を前提していたとするとともに、彼の「異端」統制策が寛文期の歴史的状況に対応するものと具体的に指摘する。

第三章第一節「『孫子国字解』の思想」は、荻生徂徠の朱子学時代の著作『孫子国字解』が、『孫子』注釈において朱子学的価値観の混入を自覚的に排除して『孫子』自体に即することで、士卒の自発的服従心を前提しない謀略的な軍隊統制論を提示したと述べる。

第三章第二節「兵学と『聖人の道』の接点」は、『孫子国字解』の思想と徂徠の儒学思想を媒介するのが『易』であり、徂徠による『易』の卜筮書説・易老説の支持・『易』と鬼神の不可分説を挙げ、徂徠の儒学体系が徂徠の兵学思想を原型にしていると述べる。

この第三章は、徂徠学の原型が『孫子』の兵学にあること、また、徂徠学と兵学を媒介するものが『易』解釈であることを実証的に分析して、さらに徂徠学が儒学の体系であるかどうかについて問題を投げかける。

第四章第一節「闇齋学派の『孫子』注釈」は、闇齋学派の山口春水の『孫子考』が、平時と戦時の原理的区別を設けることにより、戦時における道德的価値から中立的な兵法固有の原理の承認が生じており、徂徠の兵学的思考と共通性をもつことを指摘する。

本節は、荻生徂徠と闇齋学派の間に兵学的思考が通底する面のあることを実証的に指摘して、近世日本の思想家たちの思想の基盤にあるものを示唆する。

第四章第二節「松宮観山の徂徠批判」は、松宮観山が、徂徠学の基本的枠組みを継承しながらも、兵学では智略を後天的に獲得し得る能力とし、政治論では日本の国制を文武を包括するものとして、徂徠学を批判したのは、観山が兵学者であることによると述べる。

第四章第三節「観山の経世策」は、観山が、当時の歴史的課題に対応して、イデオロギー政策として仏教を民衆の自発的服従を調達する民衆教化の一翼を担うものと位置づけたこと、経済政策として貨幣・富の流通の活性化を求める積極策をとったことを述べる。

松宮観山を論じた二つの節は、徂徠と対比することで、主観的に朱子学者であった観山の兵学者としての性格を明確化し、彼の仏教政策が宝暦期の歴史的社会的状況に対応するものであることを指摘する。

第五章第一節「『新論』の尊王攘夷思想」は、『新論』の提示

する攘夷策と祭政一致論が平時の国家支配と戦時の軍隊統制と一体化する兵学的思考によるものとし、戦時の軍隊統制法と平時の礼楽による支配の分離を前提する徂徠学とは思想的断絶がある」と述べる。

本節は、『新論』の兵学的思考を照射することで徂徠学との断絶を指摘し、徂徠学ではなく後期水戸学が明治以後の国家神道の先駆をなすことを指摘する。

第五章第二節「古賀侗庵の世界認識」は、朱子学者古賀侗庵が、グローバルな視点による国家間の平等性の認識から、中国・日本の自国中心的独善主義への批判、西洋の政治・道徳・軍事技術の卓越性の承認、西洋の「窮理」精神と侵略性の相関性の洞察、西洋の侵略主義とキリスト教邪教教観の連鎖からの解放の認識をもち得たことを述べる。

第五章第三節「幕末日本のアヘン戦争観」は、侗庵『鴉片釀変記』のアヘン戦争観が、道義的立場からイギリスの侵略性を批判し、中国の自国中心的独善主義を敗因とする認識をもち得た点で先見性を持ち、幕末期のアヘン戦争観を方向づけたことを述べる。

古賀侗庵を論じた二つの節は、自分自身を無用者だと自己規定する朱子学者侗庵が、自国中心の独善主義を原理的に否定し、侵略主義を明確に否定する道義的価値観と現実認識をもつていたことを指摘したもので、朱子学における普遍的道義の理念を、単なる可能性にとどまらない現実的事例として提示する。

第五章第四節「吉田松陰における兵学と朱子学の止揚」は、吉田松陰が、幕末期の山鹿流兵学の欺瞞性と昌平饗の朱子学の曖昧性を批判する中で、仁政による民心の獲得と海外交易による軍備の充実を説き、功利と道義を止揚するユニークな思想を展開したとする。

本節は、吉田松陰において儒学の理想主義と兵学の功利主義が止揚されたことを指摘するもので、吉田松陰論が近世思想史の中核的な問題を凝集していることを示唆する。

四

以上、本書の内容についてあらまし紹介したので、次には、その内容の妥当性にかかわる事柄について述べたい。

さて、本書においてなされた個々の論証の中には、わたくしにとって疑問と思われた点がいくつかある。しかし、そのような箇所についても、前田氏は周到な用意の上で議論を進めているのであり、いま、わたくしが、紙幅の余裕のない状況で十分な論証もなく、単に疑問の要点だけを指摘することは、あまり意味ではないと考える。そこで、個々の論証についての疑問点については、いま触れることをせず、わたくし自身の論考が用意できた時点で、改めて疑問をただすこととしたい。ここでは、前田氏が本書において極めて明確に設定された、兵学と朱子学の対立という分析軸の妥当性にかかわる問題についてだけ述べる。

前田氏は、兵学について、「近世国家は（中略）兵営国家であった。兵学はその国家の支配を理論化し、正当化する思想であった」（三五頁）とする。これに対して、朱子学については、「近世日本の朱子学の理想主義は、「自由」と「平等」の「変革的原理」としての可能性をもっていた」（五五頁）とする。そして、「兵営国家としての兵学と「変革的原理」としての朱子学は」「鋭く対立していた」（七六頁）と両者の対立の次元を示すのである。兵学については現実を問題とするが、朱子学については主に可能性を問題とするのである。これは、公正な取り扱いとはいえないのではないか。

前田氏が、兵学について「可能性」をいわず、朱子学について「可能性」をいうのは、一つには、兵学を支配の思想として「悪玉」であり、朱子学は「変革的原理」として「善玉」とする価値観点によることである。それに加えて兵学は現実において優勢であるが、朱子学は、「変革的原理」として現実的な力たり得なかったという認識によるであろう。

このような、兵学と朱子学へのスタンスの違いが、具体的な思想分析のスタンスの違いとなつていくことが問題である。前田氏は、朱子学者林羅山については「羅山の主観的な意図・動機をすくいとつてみる努力が必要であるように思う」（八三頁）と主観に即した内在的理解の必要を説くが、兵学者ないし兵学的思考をベースとする山鹿素行らに対してとる態度は若干異なる。例えば「素行は主観的には「周公・孔子」の徒であったが、

客観的には兵学の思想を確立した」（二一八頁）というように、彼らの朱子学ないし儒学思想については、主観に即した内在的理解への努力を示す度合いが少ないのである。

前田氏は、このように近世日本の兵学者たちが朱子学を含む儒学を真面目に学んだことの意義を踏み込んで探るといふ方向をとらない。というより、兵学と朱子学（ないし儒学）は近世を通じて対立し続けたとするのである。だから、本書の最終節になって吉田松陰においてなされた朱子学と兵学の止揚は、それまでの兵学と儒学の統合を試みる積極的な意義のある営為の積み重ねなしに、あたかも突如として彼の個人的飛躍によって生じたかのようなのである。

もし、前田氏が、近世思想史の分析視角を、兵学と朱子学ないし儒学の対立の面にだけでなく、両者の統合の面にもおいていたら、少なくとも右の松陰の思想の生成は、もう少し必然性のあるものとして叙述されていたのではなからうか。わたくしは、儒学と兵学を止揚したとする吉田松陰論が本書の中でまことに不安定な位置を占めていると思う。それは、吉田松陰論にとどまらない問題を含んでいるのであって、それが、本書の全体を貫く兵学と朱子学の両極の対立という分析軸の妥当性を留保しておきたい気持ち、わたくしに起こさせるのである。

とはいえ、わたくしは、このことが本書の学問的価値を損ねるものとは全く思わない。そもそも、前田氏自身もいうように、主観的価値関心なしの客観的事実の研究などということはありません。

得ない。問題は特定の価値関心にもとづく研究が、いかにして学問性を保持し客観性を確保し得るのかということであろう。そのために必要なことは、社会的には研究者の相互批判の可能な場の存在であるが、研究者自身のこととしては、自己の立場性の明示である。

前田氏は、本書において、分析視角と問題設定、研究者としての価値観を明示しており、かつ論証も明晰である。それ故に、読者は、本書におけるさまざまなレベルの主張について、著者の主体的観点からどの点にどのようなバイアスがかかっているかを比較的容易に判別可能である。それが、本書をめぐるさまざまなレベルの主張についての学問的相互批判を可能にし、客観性を担保しているのである。そして、本書は、このような主体的価値関心からして発掘された、批判的検討に値する論点を非常に多く含んでいるのであって、まさにこのことが本書に高い学問的価値を与えている理由である。

本書は、このように主体的価値関心と客観的事実分析との緊張をもって構成されたが故に、学問的刺激にみちた書物である。わたくしは、本書が、日本の近世・近代の思想史に関心をもつものにとつての必読書となるものと考えている。

(岡山大学教授)